

僕は知っている 大谷仁志

僕は知っている

車が行き交うセンターラインが敷かれたアスファルトの道  
昔ここが線路だったことを

銀色に光ったレールの上を車輪の音を響かせて  
軽やかに列車が走っていった光景を

真一文字に飛びながら鳴く雲雀の下で

黒い瓦屋根の駅舎が来る君を迎えた春の朝を

僕は知っている

梅雨の切れ間に線路脇に鮮やかに咲く立葵の前で

真昼の陽射しをまともを受けて佇んでいた君を

朝霧に包まれたホームで

昨日より一枚厚着で列車を待っていた君のしなやかな髪の毛の重さを

空を覆うねずみ色の雲から粉雪が舞い散る日に

列車の窓ガラスに映った君のほほ笑む横顔を

僕は知っている

昨日まで誇っていたその灯が消え去ろうとする今日も

花束を贈るように君の頬が美しかったことを

夕陽が沈み駅の時計の長針が時を刻んだとき

去り行く列車の尾灯を見送る君の瞳からかすかに涙が零れ落ちたことを

もう列車が来なくなつた日に

黙って駅舎を眺めていた君のどこか寂寥とした眼差しを

そして

季節が変わり、君が大人になったことを…

ああ、僕は知っている

昔ここが線路だったことを

軽やかに列車が走っていった光景を

僕は知っている